人吉のまつり

～春夏秋冬・四季の楽しみ～

目　次

はじめに ……1

青井阿蘇神社　おくんち祭り / 夏越祭 / 初午大祭 …2

市内各地のまつり ……4

1　岩清水地蔵尊夏まつり …… 6

2　願成寺不動尊夏まつり …… 6

3　新山稲荷神社初午大祭 …… 7

4　菅原天満宮夏祭り …… 7

5　祇園神社夏祭り …… 8

6　金比羅宮夏祭 …… 8

7　二日町えびす祭 …… 9

8　九日町夏えびすまつり …… 9

9　聖徳太子夏祭り …… 10

10　伊勢大神宮および地蔵尊夏祭り …… 10

11　多子塔公夏祭り …… 11

12　新町地蔵尊夏祭り …… 11

13　ゆうれい祭り …… 12

14　老神神社大祭 …… 12

15　井口薬師堂薬師御夜 …… 13

16　北向き地蔵祭り …… 13

17　法身塔夏祭り …… 14

18　聖泉院観音堂夏祭り …… 14

19　鶴田町あみだ如来夏祭り …… 15

20　大村古墳まつり …… 15

21　人吉水天宮夏祭 …… 16

22　出町地蔵尊夏まつり …… 16

23　水難除け地蔵尊夏まつり …… 17

24　古仏頂町観音さん祭り …… 17

25　大畑麓町の御伊勢講 …… 18

26　ひゅうはぎ市(えびす祭り) …… 18

27　大畑麓町の地蔵および観音信仰 …… 19

28　山の神まつり …… 19

29　宝来町薬師夏まつり …… 20

30　豊光院釈迦如来様夏祭り …… 20

31　高塚神社秋季大祭 …… 21

32　上永野薬師堂夏祭 …… 21

33　文珠堂夏祭 …… 22

34　鹿目の滝まつり …… 22

35　前村薬師堂夏祭り …… 23

36　八坂神社夏祭り …… 23

37　馬頭観音夏まつり …… 24

38　観音堂夏祭り …… 24

39　不動尊夏祭り …… 25

40　菅原神社夏まつり …… 25

41　牛塚神社祭り …… 26

「旧暦」・「新暦」について ……26

御伊勢講 …… 27

観音信仰と相良三十三観音めぐり …… 28

庚申塔と庚申信仰 …… 30

おわりに …… 31

〈例　　言〉

1　本書は、人吉市文化財保護委員会が、まつりの関係者に対して聞き取り調査を行った結果をまとめたものである。

2　本書におけるまつりのタイトルは、「広報ひとよし」2015 年 7 月 15 日号と 2016 年 7 月 15 日号「ひとよしの夏祭り」での表記を使用している。

はじめに

人吉市内の各所で行われている「まつり」についての調査報告書です。関係団体からの届け出をまとめた「人吉市内のまつり一覧表」には、100近い祭りが掲載されていて、その多さに驚きました。しかし、個々の祭りについての内容をまとめたものが見当たらないので、その様子や由緒、歴史などを調査してみようと、文化財保護委員会の中で話し合ったのが最初でした。大・小・個人・団体すべてのまつりを取り上げたかったのですが、私たち調査委員の数や時間諸々考えて、今回は相良七百年の歴史文化が直に見えることをコンセプトに据えました。

国・県・市指定文化財関係のまつり、江戸時代から続いているという由緒や伝承を継ぐまつり、地域のシンボル的存在の神仏を祀るまつりなど、多岐にわたります。地域を守る神仏を核に据えた、郷土への愛着と絆を示すこれら現代の祭りは、まさに「日本遺産」に認定された相良七百年史物語につながっているとも言えるでしょう。

祭り当日の様子を撮影し、関係者への聞き取りと裏付けの資料探しなどに丸二年もかかってしまい、その間に幾つかの祭りが休止状態になりました。この冊子は、内容を簡潔にまとめた調査報告書のダイジェスト版ながら、伝統行事の継続が危ぶまれる中で、その刊行意義を感じていただければ幸いです。

多くの方々にご協力いただいたお陰で、このように報告できる運びとなりました。ありがとうございました。今、見直してみると、取り上げなければならなかったまつりが数多くあることに気づかされます。まつりは私たちの先祖が残してくれた宝物です。新しい形のまつりも出現しています。これからも調査を続け、いつかお届けできればと思います。なお、掲載できなかった祭りの関係者皆様には、心よりお詫び申し上げます。

平成２９年3月

人吉市文化財保護委員会委員長　井上　道代

国宝青井阿蘇神社のまつり

国宝青井阿蘇神社は、相良700年の統治下で特に重要な神社として、現代においても地域住民から「青井さん」と呼ばれ、親しまれています。

社殿は、急勾配の茅葺屋根や、軒から下を黒漆塗としつつ、組物や部材の面に赤漆を併用する技法など、人吉球磨地方の独自性の強い意匠を継承する一方で、彫刻や彩色、錺(かざり)金具などは桃山期の華麗な装飾性を機敏に摂取しており、その後の人吉球磨地方の社寺造営の規範となっており、日本遺産人吉球磨のタイトルにある「相良700年が生んだ保守と進取の文化」を読み取ることができます。

この青井阿蘇神社では、3つの大きな祭り（三大祭）が四季を通じて行われ、多くの住民がさまざまな形でかかわっています。

日本遺産認定

相良700年が生んだ保守と進取の文化
～ 日本でもっとも豊かな隠れ里 － 人吉球磨 ～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

おくんち祭

古来より誠にめでたいとされてきた陽の最高の数が重なる重陽の日（旧暦9月9日）に神様が鎮座された縁日をお祝いする神社誕生の祭りがおくんち祭です。現在は新暦の10月9日の神幸式を中心に3日から11日までの日程で行われています。

おくんち祭りの期間中に火災の禍がないように祈願する3日の鎮火祭や、8日の球磨神楽（国指定重要無形民俗文化財）の奉納は人吉球磨地方独特のもので、長い歴史の中で育まれてきた文化やしきたりが大切に今に息づいています。

10月9日に行われる神幸式は、チリン、チリンと澄んだ音色をさせるチリン旗を先頭に、獅子、御神宝、神輿などの行列が市内を練り歩く賑やかな祭りです。

昔は、祭りの日は一般民衆の境内立ち入りが許されておらず、蓮池の周囲を巡幸する静かな神事だったといわれています。

祭りの日は、「赤飯、煮しめ、つぼん汁(しゅる)」という家庭で作られる定番料理と、無病息災を願い、子どもの頭を獅子に噛んでもらうという風習は、古来と変わらず今も受け継がれています。

夏越祭（なごしまつり）

南北朝時代の至徳3（1386）年 7代相良前頼（さきより）の時代に始まり、一時中断しましたが、戦国時代の天文2（1533）年 16代相良義滋（よししげ）によって再興され、現在まで600年間続く伝統的神事が夏越祭です。

多忙な日常生活で知らず知らずに身についた罪（つみ）や穢（けが）れを人形（ひとがた）に封じ込め、祓い清める特殊なお祓い神事を行います。

幣殿（へいでん）で、人形に罪・穢れをうつすお祓い神事を行い、神職に続いて、参拝者が順に、庭に設けられた茅（ち）の輪を左・右・左に3回くぐります。人形は唐櫃（からびつ）に納められ、茅の輪くぐりを行い、最後に茅の輪に無数に取り付けられた御幣（ごへい）を競って取り合い、家に持ち帰り、神棚や玄関に飾り、災難除けのお守りとします。

初午大祭（はつうまたいさい）

農耕を司る宇迦霊神（ウカノミタマノカミ）を祀った稲荷神社の初午（はつうま）は、和銅4（711）年2月の初午日の午の刻（正午頃）に天下られたことに由来し、旧暦2月の初午日に盛大に斎行されます。

「稲荷」は「稲成」の意味があり、稲が立派に成育することを意味し、五穀（食物）を司る農業の神として厚い信仰が寄せられ、五穀豊穣や福徳を祈願するものでした。

江戸時代、商工業が発達するにつれ、衣食住を司る諸産業の神としての性格が強くなり、商家や町屋のいたるところに祀られるようになったようです。

宝暦9（1759）年27代相良頼央（よりひさ）の時代、人吉球磨は度重なる災害や藩主交替で経済的に疲弊していたため、豊饒と安泰を祈願して勧請されました。

午前11時からの神事を皮切りに、境内において開運福引や芸能大会、幸福餅投げが開催され、多数の参拝者で賑わっています。

N
人吉IC
光生病院
西人吉
農村集落センター
中原小
人吉浄水苑
老人福祉センター
堤病院
スポーツパレス
カルチャーパレス
ゆめマート
人吉二中
村山公園
球磨工
人吉西小
善隣保育園
人吉高校
相良藩願成寺駅
Books Misumi
人吉東小
人吉城趾
医療センター
永国寺
人吉一中
季の杜石庭
ひまわり亭
西瀬小
鶴屋
人吉市役所別館
東間小
人吉連合青果
人吉
人吉市
市内各地のまつり
各地域に根付いたまつりが行われています。
記号凡例
…人吉東校区
…人吉西校区
…東間校区
…大畑校区
…西瀬校区
…中原校区

開催地図

青井稲荷神社　初午大祭	⑭ 老神神社大祭
青井阿蘇神社　夏越祭	⑮ 井口薬師堂薬師御夜
青井阿蘇神社　おくんち祭	⑯ 北向き地蔵祭り
① 岩清水地蔵尊夏まつり	⑰ 法身塔夏祭り
② 願成寺不動尊夏まつり	⑱ 聖泉院観音堂夏祭り
③ 新山稲荷神社初午大祭	⑲ 鶴田町あみだ如来夏祭り
④ 菅原天満宮夏祭り	⑳ 大村古墳まつり
⑤ 祇園神社夏祭り	㉑ 人吉水天宮夏祭
⑥ 金比羅宮夏祭	㉒ 出町地蔵尊夏まつり
⑦ 二日町えびす祭	㉓ 水難除け地蔵尊夏まつり
⑧ 九日町夏えびすまつり	㉔ 古仏頂町観音さん祭り
⑨ 聖徳太子夏祭り	㉕ 大畑麓町の御伊勢講
⑩ 伊勢大神宮および地蔵尊夏祭り	㉖ ひゅうはぎ市（えびす祭り）
⑪ 多子塔公夏祭り	㉗ 大畑麓町の地蔵および観音信仰
⑫ 新町地蔵尊夏祭り	㉘ 山の神まつり
⑬ ゆうれい祭り	㉙ 宝来町薬師夏まつり
	㉚ 豊光院釈迦如来様夏祭り
	㉛ 高塚神社秋季大祭
	㉜ 上永野薬師堂夏祭
	㉝ 文珠堂夏祭
	㉞ 鹿目の滝まつり
	㉟ 前村薬師堂夏祭り
	㊱ 八坂神社夏祭り
	㊲ 馬頭観音夏まつり
	㊳ 観音堂夏祭り
	㊴ 不動尊夏祭り
	㊵ 菅原神社夏まつり
	㊶ 牛塚神社祭り

1 岩清水地蔵尊夏まつり（いわしみず　じぞうそんなつ）

東

開催場所	岩清水地蔵堂周辺（願成寺町）
祀られている神仏等	地蔵菩薩
特　徴	地蔵堂は、人吉市と相良村境の県道端に建てられていて、ここを通る旅人は、旅の安全を祈ったという。 地蔵の横には、宝永3（1706）年の庚申塔もある。 道路工事の度に、地蔵堂は場所を少しずつ移動してきた。工事以前は、地蔵堂の近くに清水が湧き出ていて、道行く人のノドを潤していたといわれている。
祭　日	旧暦６月24日 （現在は、７月下旬の土曜日に実施）
主　催	南願成寺町内会
現　状	夕方、観音寺住職による法要の後、道路脇に座を作り、バザーやくじ引きを行う。当番がこしらえた料理で飲食し、語らいの場にもなっている。 この地蔵尊のお祭りをするようになってからは、交通事故がなくなったと、地蔵尊の近くの住民は日々の掃除とお供えを欠かさず、お祀りしている。

2 願成寺不動尊夏まつり（がんじょうじ　ふどうそんなつ）

東

開催場所	願成寺境内、人吉こども園内運動場（願成寺町）
祀られている神仏等	木造不動明王立像（熊本県指定重要文化財）
特　徴	不動明王像は、天福元（1233）年創建の相良家菩提寺である願成寺に安置されている。平安時代末に製作された仏像と推定され、相良700年を守り続けている。 この像は、上の寺から新山不動堂、そして願成寺へと移転した。現在は、享保13（1728）年作の厨子に納められている。江戸時代作の二童子像が両脇に控えている。
祭　日	７月下旬の土曜日
主　催	北願成寺町内会、人吉こども園
現　状	元来は願成寺内での供養まつりだったと思われるが、地域が中心となってまつる形になっている。 現在は、舞台が作られ、午後6時半から舞踊演芸が繰り広げられる。併設された人吉こども園の園児による「竹樽太鼓」や神輿、遊戯が賑わいを盛り上げる。住民たちで盛り上がる毎年恒例の行事として定着している。

3 新山稲荷神社初午大祭（にいやまいなりじんじゃはつうまたいさい）

東

開催場所	新山稲荷神社境内（願成寺町）
祀られている神仏等	稲荷大明神
特　徴	江戸時代中期の宝暦7（1757）年、近年の自然災害や不作などの七難即滅を願い、26代相良頼峯（よりみね）が大檀那となり、願成寺30世猷禅法印が導師として開眼供養を行い、新山に勧請した。この山は祭神が稲荷大明神なので稲荷山とも別称する。
祭　日	3月吉日の日曜日
主　催	北願成寺町内会、子ども育成会、神社総代会
現　状	午前、願成寺住職による読経の後、子ども神輿が願成寺町内を練り歩く。子どもや関係者はみな揃いのオレンジ色の法被を着用する。女性は煮しめや赤飯などの料理を用意し、まつりを盛り上げる。夕方からは店が並び、福引などが行われる。

4 菅原天満宮夏祭り（すがわらてんまんぐうなつまつり）

東

開催場所	菅原天満宮周辺（南泉田町）
祀られている神仏等	菅原道真
特　徴	菅原天満宮の創建年紀は不明。昔は社壇がなく、古木を祀ったので天神の森といわれていた。 菅原道真（845～903年）は、平安時代の学者の家に生まれた。藤原氏との政争に敗れ、大宰府に流罪となった。死後、祟りをなしたことから神様として祀られるようになったといわれている。 大永年間（1521～1527年）に祠が立てられ、文禄3（1594）年に修造された。 周辺は木下村と言われていた時代があり、木下天神とも呼ばれた。 元禄8（1695）年の修復時、旧石を以て御神体とした。その際に、地域住民が力を合わせ、菅原道真の像を製作し、社壇を建てて祀った。
祭　日	7月25日
主　催	北泉田町・南泉田町天満宮奉賛会
現　状	「学問の神様」として、各地から参拝客が訪れる。 青井阿蘇神社神職による神事の後、子ども御輿が町内を練り歩く。住民は夜店を開き、カラオケ、踊り、くじ引きなどが行われる。子どもたちの習字や絵画、写真などの展示もある。

5 祇園神社夏祭り（ぎおんじんじゃなつまつり）

東

開催場所	祇園神社（七日町）・七日町会館広場
祀られている神仏等	素戔嗚尊（スサノオノミコト）
特　徴	建武元（1334）年、5代相良頼広（よりひろ）夫人のために創建。夫人は、宇土殿の息女であり、城から宇土の方角に向かってお参りしたいとの願いがあり、祇園神社が勧請されたとの記録が残っている。 祇園神社の創建時、社壇の下からにわかに清水が湧き出した。その水は甘露のごとく美味しく、不思議な清水であった。そこで曼荼羅供養をしたので、この水の流れを「曼荼羅川」というようになった。
祭　日	旧暦６月 25 日
主　催	七日町祇園神社夏祭り実行委員会
現　状	町内の役員が集まり、神社内で青井阿蘇神社神職による神事が行われ、夕方から七日町公民館でバザーや飲食、バンド演奏で歌ったり、楽しく交流する。 以前は、祇園神社前が会場だった。

6 金比羅宮夏祭（こんぴらぐうなつまつり）

東

開催場所	五日町若宮神社境内
祀られている神仏等	金毘羅大権現
特　徴	鎌倉時代末期創建の由緒ある若宮神社の境内に祀られている。球磨川が開鑿（かいさく）され、八代御仮屋からの海上交通が盛んになり、水難除けとして四国金毘羅信仰が自然と開始された。
祭　日	旧暦６月 10 日
主　催	五日町内会
現　状	以前は、商売繁盛を願う市内有数の夏祭りとして賑わっていた。 最近では、午後6時半に花火を合図にまつりが開始される。金比羅宮の参詣後に御神酒が振る舞われ、露店の賑わいと福引などで、楽しいひと時を過ごす。 少子高齢化によって、参詣者も高齢者が目立ち、子ども神輿も行われず、祭りの存続を危ぶむ声もある。

7 二日町えびす祭

東

開催場所	二日町内会館周辺
祀られている神仏等	恵比寿大明神
特　徴	二日町は、江戸時代初期からの町人町で、商売繁盛の神様として恵比寿大明神を祀ってきた。 祭り当日は、「男神」と「女神」の夫婦恵比寿2体の白着物を新調し、えびす堂の祠から外に出し、祭壇を作り、供物を供えて神事を行う。 えびす堂横の「火除け不動尊」は、二日町が火事に遭った後、新たに奉納されたもので、長い間開けられていないという。
祭　日	7月の第3日曜日、または第4日曜日
主　催	二日町内会
現　状	午後4時より青井阿蘇神社神職による神事の後、二日町の町内役員等の玉串奉奠が行われる。 午後6時から福引大会が開催され、多くの参加者があり、賑わっている。

8 九日町夏えびすまつり

東

開催場所	九日町通り
祀られている神仏等	蛭子大明神
特　徴	社堂は、現在の肥後銀行人吉支店の裏に建てられ、祀られていた。銀行が建て替えられるときに社堂は壊され、蛭子大明神は観音院に預けられた。札の辻に現在の社堂（県立球磨工業高校建築科作）を建て、蛭子大明神も補修し、鎮座した。 古記録によると、20代相良長毎の代に、青井阿蘇神社から移されたともいわれているが、正確にはわからない。
祭　日	夏は8月12日（初えびすは1月10日）
主　催	九日町内会
現　状	午前10時に青井阿蘇神社神職による神事が行われ、夕方からは、露店が出て、誰でも参加可能な踊りもあり、賑わっている。

9 聖徳太子夏祭り（しょうとくたいしなつまつり）

東

開催場所	大工町公民館（太子堂横）
祀られている神仏等	聖徳太子立像
特　徴	大工町は、江戸時代に「東同心」と呼ばれた特別な誇り高い大工職人の町であった。 大工集団は、各地の神社・武家・商人達の建物建築に携わる世襲の家柄であったようで、棟札などに名前が残っている。 大工は、芸道上達や商売繁盛のため「聖徳太子」を信仰していた。 太子堂は昭和8（1933）年に現在地へ移転され、格天井が特徴の前仏堂跡は町内会館として利用している。以前は、願成寺の飛地であった。 太子堂には、元禄年間（1688～1703）の大石常得作聖徳太子画像も掛けられている。
祭　日	7月の第3日曜日
主　催	大工町内会
現　状	太子堂の正面軒先に掲げられた鰐口（わにぐち）には、「宝永8（1711）年作 大村講中寄進」とある。 午後5時から願成寺住職による供養が行われ、午後6時から直会（なおらい）が行われる。以前は子ども神輿や福引、映画会などが開催されていたが、子どもが少なくなってからは供養のみ行われている。

10 伊勢大神宮および地蔵尊夏祭り（いせだいじんぐうおよびじぞうそんなつまつり）

東

開催場所	紺屋町会館周辺
祀られている神仏等	伊勢大神宮、地蔵菩薩
特　徴	江戸時代初期、青井阿蘇神社神職たちによって始まった御伊勢講が相良領内に広まったが、人吉城下では唯一紺屋町に伊勢神宮が祀られた。 伊勢神宮の使者が来訪した際には、紺屋町町内の伊勢屋が、町人の上納金集金係を務めていた。 以前は、鹿児島県や沖縄県からも参詣客が訪れ、伊勢屋に泊まっていたという話もある。現在は、紺屋町内から伊勢神宮への参詣はない。 明治18（1885）年の新築棟札がある。最近の造替時には、伊勢神宮からの諸材払い下げがあった。
祭　日	7月の第4土曜日
主　催	紺屋町内会
現　状	午前11時から青井阿蘇神社神職による祝詞奏上（のりとそうじょう）が行われ、午後1時から観音院住職による地蔵菩薩への読経で供養を行っている。午後4時から子ども神輿が町内を練り歩き、午後6時から福引が行われる。

11 多子塔公夏祭り（たしとうこうなつまつり）

東

開催場所	多子塔周辺（鍛冶屋町）
祀られている神仏等	多子塔
特　徴	地元の言い伝えでは、江戸時代前期にこの地で疫病が流行り、亡くなった多くの子どもたちの冥福を祈り、子を亡くした親たちが塔を建てたという。 正保4（1647）年建立の「咄　多子塔」には、「この庚申信仰を大切にする一族は賑わい栄え、子々孫々が安穏に暮らせるだろう」という内容とともに、作者の観音寺17世南隣和尚の名が刻まれている。
祭　日	旧暦6月1日
主　催	鍛冶屋町内会
現　状	塔の前で、青井阿蘇神社神職による神事が行われ、子どもも大人もお参りする。神事が終わると子ども神輿が町内を練り歩く。夕方からは塔の近くに露店を開き、誰でも楽しむことができる。 祭りの当日には、「咄　多子塔」という床の間に掛ける掛け軸が町内の当番の家に引き渡されるほか、近年、祭り会場では「多子塔守護」の御札を授かることもできるようになった。

12 新町地蔵尊夏祭り（しんまちじぞうそんなつまつり）

東

開催場所	新町地蔵堂周辺
祀られている神仏等	地蔵菩薩
特　徴	宗慶寺十三坊の一つである地蔵堂は、相良氏入国以前の平朝臣笠山周防守宗慶の建立といわれ、明応7（1498）年に再興されたと伝わる。 その後、室町時代の永禄2（1559）年 獺野原（うそんばる）の戦で宗慶寺は衰亡し、貞享4（1687）年に地蔵堂が現在の新町に移された。
祭　日	旧暦6月24日
主　催	新町内の有志
現　状	地蔵尊の功徳は三十六徳と言われ、「火難・水難・病苦・子育て・盗難などの人間の苦悩や訴えを聞いてくださる」との信仰が今もなお続き、縁日参りで賑わっている。 永国寺住職による読経が終わった後、町内会の役員を中心に、お堂や近くを流れる胸川のほとりで懇親会を行う。一方、祭りの参加者は、火災除けを願う御札を授かることができる。

13 ゆうれい祭り

東

開催場所	永国寺境内および周辺（土手町）
祀られている神仏等	幽霊の掛軸
特　徴	永国寺は、応永15（1408）年の創建で、9代相良前続の開基といわれている。 開山実底超真和尚の直筆と伝わる幽霊の掛け軸は、永国寺本堂裏の池に女の幽霊が現れたことに由来して描かれたとされ、代々受け継がれている。 明治10（1877）年の西南戦争で、西郷隆盛が本陣を構えたため、寺は戦火に遭って焼失したが、幽霊の掛軸は戦火を免れ、現在まで大切に保管されている。
祭　日	8月の第１土曜日
主　催	ゆうれい祭り実行委員会
現　状	幽霊の掛軸に由来して始まった祭り。現在は、夏の夕べの祭りとして、家族で楽しめるようにと心がけ、祭り実行委員会の若者たちが盛り上げている。遠くからも祭りに参加している人々の姿が見受けられ、露店も出店し、交通規制もされるほどの賑わいである。

14 老神神社大祭

東

開催場所	老神神社（国指定重要文化財）境内（老神町）
祀られている神仏等	瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）他、六柱
特　徴	霧島神宮と同体。 老神神社は、大同2（807）年に球磨川以南の鎮守として創建されたと伝えられている。 元々小さな社であったが、寛永5（1628）年に相良家の子孫繁栄と領内泰平を願い、20代相良長毎の命により相良清兵衛が奉行となり、現在地に再建された。 本殿は、球磨郡特有の屋根に覆屋のある珍しい寄棟造りで、桃山時代の絢爛たる彫刻が施された建物である。拝殿、神供所とともに国の重要文化財に指定されている。
祭　日	11月26日
主　催	老神神社総代会・奉賛会
現　状	現在は、住民の氏神様になっている。 祭りでは、神事、球磨神楽、餅投げなどが行われる。奉納行事として、弓道大会、生花展示、保育園児による器楽演奏、日本舞踊等が行われる。幸運の福引大会は、これを目当てに遠くから参拝する人がいるというほど、大変賑わっている。

15 井口薬師堂「薬師御夜」

西

開催場所	井口薬師堂内（井ノ口町）
祀られている神仏等	木造薬師如来坐像（熊本県指定重要文化財）
特　徴	薬師如来像は、鎌倉時代後期の正和2（1313）年の作と記録に残る。もとは井口八幡神社（神殿：熊本県指定重要文化財）の別当寺であった井口寺の本尊だったという。胎内にある修理銘には、井口寺薬師堂が焼失した際に本像もひどく焼けたため、江戸時代の寛文2（1662）年に21代相良頼寛らの援助で修理されたとある。明治維新後に井口寺が廃絶した後、現在地にお堂を造って薬師如来像を安置し、以降、住民で大事に守り伝えている。
祭　日	7月初め
主　催	井ノ口町農業振興組合
現　状	いつ頃から始まったのかはわからないが、農業をしていた人々は、田植えが終わると一息入れ、農業の疲れや田植えの厳しさをこの祭りで癒し、楽しみに集まって来ていたという。 現在は、井ノ口町農業振興組合が5班に分かれて、毎年1回当番班が祭りの進行準備をする。農家の人々は、田植えが終わって「さなぼり」として薬師堂におまいりして、夕方から八幡神社内で酒盛りをし、苦労をねぎらう。今も地域で大切に守り続けられている祭りである。

16 北向き地蔵祭り

西

開催場所	北向き地蔵堂周辺（瓦屋町）
祀られている神仏等	地蔵菩薩
特　徴	北向きに立つ地蔵で、文化4（1807）年に安置された55cmの石地蔵である。 明治維新頃、縦横1mの小さなお堂に安置されていた。昭和43（1968）年、明治100年記念の時に改築され、現在は、瓦葺屋根で段のある珍しい造りの立派なお堂に安置されている。 安産、受験、縁結び、結婚、その他各諸事願い事に御利益があると言われ、瓦屋町鳥越地区の人たちによって、大切に祀られている。
祭　日	旧暦6月13日
主　催	瓦屋町鳥越地区の当番班
現　状	午後6時より観蓮寺住職が読経する。終わったら、お堂付近で住民が料理を食べながら楽しく語らう。 普段は首から上を守る身代わり地蔵として、年中参拝者が絶えない。 鳥越地区の住民により、お堂の中はいつも花が供えられ、清掃も行き届き、大切に守られている。

17 法身塔夏祭り（ほっしんとうなつまつり）

西

開催場所	法身塔周辺（瓦屋町）
祀られている神仏等	法身塔
特　徴	法身とは、色も形もない真実そのものの体をいう。 およそ200年前、この地で疫病が流行り、その鎮静を願って塔が設置されたと伝承されている。この時期は、明和6（1769）年に31代相良長寛（ながひろ）が藩主となり、ようやく政情が安定したが、明和9（1772）年5月に3度の大雨洪水があり、郡内に大きな被害が及んだ。法身塔には「明和九壬辰天菊月吉祥日／当村中」と刻まれており、その年の9月に建立されたことがわかる。
祭　日	旧暦6月15日
主　催	瓦屋町内会の当番班
現　状	詳細は不明だが、50年ほど前は、「かないさん」といい、火を焚き、黒豆を煮てお接待をし、そのお礼としてお賽銭を持ち帰っていた。庚申信仰の一種であろうか。 現在は、夕方、近隣の方々が料理や飲み物を持ち寄り、お参りした人に接待をしている。

18 聖泉院観音堂夏祭り（しょうせんいんかんのんどうなつまつり）

西

開催場所	聖泉院境内（瓦屋町）
祀られている神仏等	聖観音菩薩（相良三十三観音十一番札所）
特　徴	聖泉院は、20代相良長毎（ながつね）夫人の位牌所として、慶安4（1651）年に一武一乗寺（廃寺）の三高和尚によって開山された。三高和尚は、臨済宗の妙心寺で修業した僧で、寛永17（1640）年相良清兵衛一件では、江戸幕府の評定所で藩主代理として出座した人物である。 聖観音像は、元々鬼木町芦原にあったが、現在は聖泉院観音堂に安置され、永田観音といわれる。 境内には、明暦3（1657）年建立の庚申石塔などがある。
祭　日	7月吉日
主　催	聖泉院
現　状	読経が終わった後、地域の人の手作り料理や聖泉院の料理を参詣客に振る舞い、雑談に花が咲く。 春秋の彼岸まつりは大々的に接待をするが、夏祭りは町内会で行っている。

19 鶴田町あみだ如来夏祭り

西

開催場所	鶴田阿弥陀堂・鶴田町会館前広場
祀られている神仏等	木造阿弥陀如来立像（人吉市指定有形文化財）
特　徴	阿弥陀如来像は、室町時代の作で、12代相良為続の影仏であり、明治維新後に廃寺となった「船場阿弥陀堂」（下新町）の本尊であると記録が残る。 お堂は、少し離れた場所にあったが、河川改修などで現在地に移された。 境内には、地蔵や庚申塔などがある。
祭　日	7月21日（現在は、7月第3土曜日）
主　催	鶴田町内会
現　状	午後3時からの読経が終わると、町内会の役員が会場づくりをし、福引抽選会、カラオケ、歌・踊り、バザー、露店などで盛り上がる。日没とともに、電灯で辺りを照らし、カラオケ大会で賑やかになる。

20 大村古墳まつり

西

開催場所	大村横穴群周辺（城本町）
祀られている神仏等	大村横穴群（国指定史跡）
特　徴	6世紀の古墳時代後期に作られた日本最南端域の装飾横穴群は、人吉駅北側崖面に東西2群26基ある。そのうち8基の横穴外面には、動物、武器、武具、幾何学文の装飾がある。大正10（1921）年3月に国史跡に指定された。 古代祖先を慰霊し、古墳群を大切にしようと「まつり」が開催されるようになった。 なかでも昭和58（1983）年から、「後醍醐天皇の墓前供養の踊り」をヒントに振付「古墳踊り」が行われるようになった。
祭　日	7月の第3土曜日
主　催	城本町内古墳まつり実行委員会
現　状	午後4時より仏式による古代人祖先の供養を行い、町内各団体代表者が墓前に五穀を供え、古代人にふんした子どもや大人が古墳群の前で「古墳踊り」を奉納する。「のど自慢大会」などが開かれ、住民による地域の交流や親睦を深める祭りとなっている。

21 人吉水天宮夏祭（ひとよしすいてんぐうなつまつり）

西

開催場所	水天宮境内周辺（駒井田町）
祀られている神仏等	天御中主神（アメノミナカヌシノカミ）
特　徴	駒井田町は、水害常襲地であったため、昭和23（1948）年8月3日、古来より、水の神として、農業・漁業・船舶業のみならず、子どもの守護神、安産、子授の神として水天宮（久留米市）を勧請し、現在に至っている。。 水天宮（久留米市）の由緒によると、建久元（1190）年、壇ノ浦の戦いの後、安徳天皇の母に仕えていた女官によって筑後川のあたりに祀られたとある。
祭　日	8月5日
主　催	駒井田町内役員会
現　状	午前10時半より青井阿蘇神社神職による神事の後、祝席を開き、午後1時より子どもと大人が御輿を担ぎ、町内を練り歩く際、担ぎ手に水をかけ、まつりを盛り上げる。 水難除けお守りの木製ひょうたんを子どもたちの首にかけて身を守る長年の風習がある。

22 出町地蔵尊夏まつり（でまちじぞうそんなつ）

西

開催場所	上青井町出町地蔵尊境内
祀られている神仏等	地蔵菩薩
特　徴	安永2（1773）年の「球磨絵図」にも描かれている由緒ある地蔵堂である。 本尊は、明暦3(1657)年作で、東隣の九日町中寄進による175cmの地蔵庚申石像である。 境内の庚申信仰を表す石造物（1716年）や鰐口（わにぐち）（1706年）から、江戸時代中期には、多くの人々によって祀られていたと考えられる。 鰐口は、池辺伝之丞寄進と記されている。 昭和6（1931）年に新堂が建立され、町内会が保存修理をしながら、現在に至っている。
祭　日	7月24日
主　催	上青井町内会
現　状	午前10時から子ども神輿が町内を練り歩く。午後4時から観音院（九日町）住職による読経の後、福引大会で賑わう。

23 水難除け地蔵尊夏まつり（すいなんよけじぞうそんなつまつり）

西

開催場所	下青井町公民館周辺
祀られている神仏等	地蔵菩薩
特　徴	近くの球磨川で子どもの水難事故があり、子どもを亡くした親が供養と子どもの無事故を祈り、地蔵を安置した。それをきっかけに、近辺の人が地蔵尊祭りを行うようになった。
祭　日	旧暦6月24日（新暦7月の土曜日に実施）
主　催	下青井町内会文化部
現　状	地蔵を公民館に移動し、みんなでお参りする。その後、子どもたちが地蔵を担いで町内を練り歩く。 町内役員・子どもの祖父母・若者などが集まり、くじ引きや焼き鳥などを楽しむ。

24 古仏頂町観音さん祭り（こぶっちょうまちかんのんまつり）

東間

開催場所	古仏頂観音堂・阿弥陀堂境内
祀られている神仏等	木造伝観音菩薩坐像（人吉市指定有形文化財）
特　徴	観音堂は、石垣積みの高台にあり、その境内地は人吉市指定史跡となっている。 観音堂の後ろは高い山、前方は田んぼが広がり、胸川が大塚地区から流れ来る。その上流から、一体の仏像が流れ着いたところから、古仏頂という地名が付いたという伝説がある。 永享12（1440）年の仏像が安置されている。また、江戸時代に地域の有志で奉納した天保10（1839）年の石造手洗鉢が石段を上がったところにある。 お百度参りでつけられた手跡が手洗鉢に残されている。
祭　日	旧暦6月18日
主　催	古仏頂町内会
現　状	地区ごとの持ち回りで、夏祭りとお彼岸の中日にお参りに来る人々に、お茶をたて、おもてなしをしている。 阿弥陀堂と観音堂、古い石塔もあり、境内の静寂は歴史の厚みを感じさせる。 幟旗（のぼりばた）を地域の有志が奉納し、祭りを盛り上げている。

25 大畑麓町の御伊勢講

大畑

開催場所	大畑麓町内廻り座元
祀られている神仏等	掛軸「天照両皇太神宮」
特　徴	江戸時代前期の17世紀後半頃から始まった講と推定されるが、詳細は不詳である。 農業の守護神である天照大神を尊崇して講が結成された。 大畑麓町が所有する文字掛け軸「天照両皇太神宮」は、伊勢神宮外宮の神官である松木末彦筆で、1670年前後に書かれたものと思われる。 年2～3回、講員の持ち回りで続いており、規約もある。 大畑麓町の次座元移り行事では、歌を歌いながら行列したらしいが、現在は歌える人がいない。
祭　日	正月、5月、9月16日
主　催	大畑麓町内会
現　状	まず、掛け軸預かりの座元に集まって新旧交代行事を行う。御馳走が用意されている中で受け渡される。その後、掛け軸を預かる次座元の家へ移動して床の間に掛け、再び直会（なおらい）が始まる。 講員の年齢が高くなり、農業中心に歩んできた地域の生活形態も変化している中、歴史的伝統行事を守り続けようとする講員もいて頼もしいが、存続には努力を要する。現在、直会は近くの公民館で行われている。

26 ひゅうはぎ市（えびす祭り）

大畑

開催場所	えびす堂前通り（大畑町）
祀られている神仏等	男女恵比寿神
特　徴	人吉市の南に位置する大畑町は、江戸時代は薩摩との交易地であった。 町内に鎮座する男女恵比寿神は、木上村十日市（錦町）からの勧請で、年代不詳。 堂内の安政5（1858）年の改築棟札には、当時の大畑町役人名が記されており、えびす社の地域シンボル的存在が偲ばれる。
祭　日	旧暦2月10日（新暦の春の彼岸に合わせて実施）
主　催	大畑町内会・老人会
現　状	以前は、年2回恵比寿講が行われ、年の暮れにはえびすを座元の家に迎え、祭日に本社に返していた。 えびす祭りの日には、市が立つが、その日は雨が多かったので、着物の裾をまくって「ひゅう（お尻）」を「はぐ（丸出しになる）」ことから、別名「ひゅうはぎ市」と呼ばれる。 男女恵比寿神の上着を新調し、神事を行ってから祭りを開始する。市が立ち、市花、市箱、雉子馬（きじうま）、目籠（めご）、市団子などが並ぶ。市花は無病息災を意味し、昔ながらの伝統的な姿を多く残している。市内で市が残るのは、ここだけとなった。

27 大畑麓町の地蔵および観音信仰

大畑

開催場所	大畑麓町の個人宅
祀られている神仏等	地蔵菩薩、観音菩薩
特　徴	大畑麓町は、中世の山城大畑城の麓に位置し、郷土集落の雰囲気を残している。 各家の地蔵および観音崇拝行事だが、いつ頃からの伝統行事なのかは不明である。中には、庚申塔（かなえさん）や青面金剛などを祀り、接待をする等、庚申信仰を感じる行事もある。 金龍山浅草寺の小さなお札を観音様に見立て信仰する家もある。
祭　日	旧暦6月14日の地蔵まつり 旧暦6月18日の観音まつり
主　催	各家
現　状	神仏に守られ生きる、昔ながらの信仰心が満ち溢れており、参詣後の接待内容は各家で異なる。 必ず煮豆が出ることから、子どもたちは「豆貰い」といって、10軒ほど廻って菓子集めを楽しんでいたが、最近はあまり姿が見られなくなっている。主役は女性で、田植えの後、繁忙期の一日を煮豆や赤飯、酢の物、漬物などを食べ歩き、おしゃべりをして楽しんでいたようである。

28 山の神まつり

大畑

開催場所	大畑町宇土山（大畑町）
祀られている神仏等	山の神
特　徴	昔、山中で行方不明となった女の子を山の神による神隠しと考えた人々が、神を畏敬し、その怒りの気を静めるための祠を作り、子どもたちの無事を祈って祭りを始めたという。 山の神は、女性の入山を喜ばないので、祭りの参加者は男性に限られる。
祭　日	新暦1月5日、6日
主　催	大畑町内会・子ども会
現　状	江戸時代から続くこの地の伝統行事である。 祭りの参加者は男性に限られる。男性は集団で宇土山に入り、神の祠を新築して、石神に白い衣を着せ、注連縄を飾り、お供え物を上げる。赤飯や塩焼き鰯・菓子などで直会を開き、神事の締めとして祠前でチャンバラをする。入山できない女性は、公民館でぜんざい等を楽しみながら、留守番をする。

29 宝来町薬師夏まつり（ほうらいちょうやくしなつ）

西瀬

開催場所	宝来薬師堂周辺・宝来町公民館
祀られている神仏等	薬師如来坐像
特　徴	室町時代後期に作られた一木造の薬師如来坐像が彩色され、堂内に安置されている。 安永2（1773）年の「球磨絵図」には、現在の薬師堂の近辺に「蓬莱堂」が描かれており、この仏像が蓬莱堂の本尊だった可能性もある。 蓬莱堂の創建は不明だが、天文16（1547）年、願成寺真誉が、蓬莱堂に献灯したという史料が残っている。 蓬莱堂の廃絶とともに、薬師如来坐像は永国寺に預けられたが、昭和27（1952）年に現在の薬師堂が建立され、そこに安置された。敷地内には工事中に掘り出された「隠れ念仏碑」などが建てられており、地域の厚い信仰が感じられる。
祭　日	7月の第4日曜日
主　催	宝来町内会夏祭り実行委員会
現　状	午後3時からの法要が終わったら、賽銭箱を先頭に、子ども御輿が町内をまわり、笛や太鼓で祭りの開催を知らせる。町内の人は賽銭を入れる。境内では実行委員がテントを張り、焼き鳥、ビール、かき氷などを準備し、午後6時から福引大会が行われる。

30 豊光院釈迦如来様夏祭り（ほうこういんしゃかにょらいさまなつまつり）

西瀬

開催場所	下薩摩瀬町内会館・地域学習センター多目的広場
祀られている神仏等	釈迦如来坐像
特　徴	豊光院は、16代相良義滋（よししげ）の母の位牌所として創建された。戦国時代から江戸時代中期までは原田にあったが、寛政6（1794）年に薩摩瀬に再興された。 明治維新で廃寺になったが、大正年間（1912～1926年）に仏堂と共に、現在地に再度移転している。 昭和38（1963）年の公民館建設時に、釈迦如来像を現在地の仏堂に安置し、翌年彩色されている。それ以降、祭りが始まったと思われる。
祭　日	8月の第１土曜日
主　催	下薩摩瀬町内会
現　状	仏堂前で読経を終えたら、露店が立ち並び、町内全体で賑わう。 周辺の田畑に新しい町を形成していく中で、地域の親睦を深める祭りの形態と言える。

31 高塚神社秋季大祭（たかつかじんじゃしゅうきたいさい）

西瀬

開催場所	高塚神社境内（上永野町）
祀られている神仏等	東喜兵衛休斎
特　徴	高塚山頂のお堂には、東喜兵衛休斎が祀られている。休斎は、上村相良氏庶流の東駿河守の子であるといわれ、岡本城（現あさぎり町上）城主となったが、老年に人吉の常楽寺（廃寺）で兵道を極めた。寛永4（1627）年に同寺にて74歳で病死した休斎は、遺言により高塚山で火葬されたが、その日は雷電振動した不思議な天候であったという。 このほか、八代郡の高塚権現と同体とされ、昔は高塚権現（ごんげん）と呼んでいたという記録がある。慶長年間（1596～1614）の初め、八代郡より、御神体の鏡三面が勝福寺（現あさぎり町荒茂、廃寺）に預けられ、寛永19（1642）年に返却する際、鏡一面を高塚山に祀ったのが神社の始まりという説もある。
祭　日	9月23日
主　催	高塚神社清掃管理組合
現　状	住民が当番で受付に座り、参詣者に御札を授与している。 昔は、険しい山道を歩いてお参りしていたが、現在は道路が整備され、車で往来できる。

32 上永野薬師堂夏祭（かみながのやくしどうなつまつり）

西瀬

開催場所	上永野薬師堂周辺
祀られている神仏等	薬師如来像
特　徴	400年くらい前、疫病が流行った時、お堂を造り、お祀りしたところ、疫病が治まったという。 薬師様は子ども好きで、子どもたちを守り、お堂で騒いだり、遊んだり、いたずらして、傷だらけになっても、何も起こらなかったが、大人たちが同じことをすると良くないことが起こったという。 昭和中期頃までは、近くに住む子どもたちが薬師様を川に持ち出し、一緒に泳いで遊んでいたと高齢者は話す。 薬師堂は、山手にあったが、傷みがひどく、現在地に建て替えられた。 今は薬師如来像も厳重に保管され、塗り替えの話も持ち上がったが、昔のままの姿で受け継がれている。
祭　日	旧暦6月8日
主　催	上永野町内会
現　状	住民が当番で役員になり、祭りの準備を行う。神事の後、お参りした人が料理を持ち寄り、店を開いて、飲食したり、歌ったりして楽しんでいる。

33 文珠堂夏祭（もんじゅどうなつまつり）

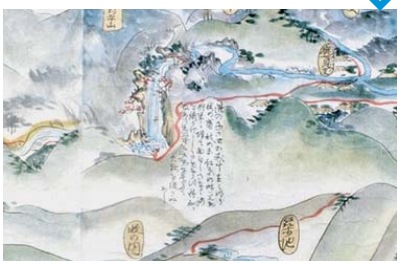
西瀬

開催場所	文珠堂境内（下永野町）
祀られている神仏等	文殊菩薩、弘法大師像
特　徴	文珠堂の起源は不明である。もとは永野町堂の園にあったが、嘉永3（1850）年に現在地に移された。 昭和39（1964）年、国有地であった敷地を地元で買い上げ、下永野町八合地区の住民で守ってきたが、昭和52（1977）年にお堂が焼失したため、2年後に住民の努力で再建された。 もとの文殊菩薩像は、室町時代の作と伝わるものであったが、お堂とともに焼失し、現在は新しい文殊菩薩像を安置している。 一緒に祀られていた弘法大師像も火災に遭ったが焼け残り、安置されている。 火災の時、火柱が天に昇り、「仏様が天に上った」と住民たちは噂したという。
祭　日	旧暦6月24日（新暦の集まりやすい休日に実施）
主　催	文珠堂奉賛会・青壮年部
現　状	昭和60（1985）年から地域の親睦を深める祭りへ発展していった。住民がお堂を管理し、守る中で、若者が中心となって盛り上げ、老若男女集まり、楽しい祭りになっている。

34 鹿目の滝まつり（かなめのたき）

西瀬

開催場所	鹿目の滝（人吉市指定名勝）（鹿目町）
祀られている神仏等	鹿目の滝（日本の滝100選）
特　徴	雄滝（36m）と雌滝（30m）、雄滝上流の平滝の3つの滝からなる。断崖から一直線に落下する雄滝の崖下は人吉層と呼ばれ、昔、人吉盆地が湖であったことを示す。 近くには河合又五郎屋敷跡がある。「落ち行く先は九州相良」で有名であるが、21代相良頼寛（よりひろ）の時に、河合又五郎をかくまってほしいとの頼みがあり、鹿目の山中に屋敷を準備していたとの伝説がある。又五郎はたどり着くことなく、途中で殺されてしまったといわれるが、今もその屋敷跡が残っている。
祭　日	8月の第1日曜日
主　催	鹿目町内会
現　状	午前10時、青井阿蘇神社神職による神事で安全祈願をして開始。住民がそうめん流し、バザー、焼き鳥、ヤマメ塩焼き、かき氷などで汗を流し、大勢の人が集まってくる。 平成28（2016）年は休止された。



35 前村薬師堂夏祭り（まえむらやくしどうなつまつり）

中原

開催場所	前村薬師堂・前村公民館（下林町前村）
祀られている神仏等	薬師如来坐像、十二神将像
特　徴	室町時代の作とされる薬師如来像、十二神将像を安置する薬師堂。 室町時代に流行った疫病を鎮めるために祀るようになったと伝えられる。 かつては、「薬師さん」と「十二神さん」を別々にお祀りしていたという。 明治21（1888）年に建て替えられた現在の御堂は、100mほど南にあったが、平成20（2008）年にそのままの形で前村公民館敷地内へ移転された。
祭　日	7月の第１土曜日
主　催	下林町前村町内会
現　状	楽行寺住職による読経の後、各自お供え物をし、お参りする。焼き鳥や焼きそば、かき氷、カレーなどを作って販売し、盛り上がる。

36 八坂神社夏祭り（やさかじんじゃなつまつり）

中原

開催場所	八坂神社（祇園堂）境内（下林町）
祀られている神仏等	素戔嗚尊（スサノオノミコト）
特　徴	創建年代は不明。 天文年間（1532～1554）に藤原頼方によって再興され、万治年間（1658～1660）に現在地へ移されたという。 この付近は「御仮屋」と呼ばれており、参勤交代の帰路、藩主の行列がここで一休憩し、行列を調えて人吉城下に入った。 また、天保12（1841）年の蒲山（なばやま）騒動の際、ここに集結した農民は、ときの声を上げ、人吉城下町に押し寄せたといわれる。
祭　日	7月下旬
主　催	下林町仮屋町内会
現　状	青井阿蘇神社神職による神事の後、各自お供え物をし、お参りする。焼き鳥や焼きそば、かき氷、おにぎりなどを作って販売し、賑わっている。

37 馬頭観音夏まつり

中原

開催場所	下林町二区公民館周辺
祀られている神仏等	馬頭観音、子安観音
特　徴	昭和10(1935)年頃安置。当時、農耕で重宝された馬や牛の無病息災の守り神として、町内の有志で協力して祀った。 併せて、子どもが健康に育つようにと、子安観音も安置された。 かつては、馬や牛を引いて、お参りをして祭りを行った。露天商も店を出し、現在よりも賑わいがあったという。 また、日常的に、子牛などが生まれると引いてきてお参りしており、遠方からの参詣者もいた。
祭　日	旧暦６月18日
主　催	下林町二区町内会
現　状	供物をし、各自でお参りする。 担当の班が、料理を持ち寄って振る舞い、焼き鳥やかき氷、おにぎりなどを作って販売。 現在は、農耕の機械化に伴い、牛馬を飼うところはなくなり、地域の親睦を深める祭りの形態となっている。

38 観音堂夏祭り

中原

開催場所	湯の元観音堂境内（相良三十三観音八番札所） 人吉市老人福祉センター周辺（温泉町）
祀られている神仏等	聖観音立像
特　徴	湯の元観音堂の前身は「湯楽寺」と考えられる。「湯楽寺」は、12代相良為続（ためつぐ）が井口八幡神社参拝の帰途に、林温泉に湯治して一首詠んだ禅寺である。 木造聖観音立像は、室町時代の作と考えられているが、宝冠（ほうかん）が所在不明の状態である。 お堂は道端にあり、イチョウの大木や享保3(1718)年の庚申塔も立ち、境内には地蔵も祀られている。
祭　日	旧暦6月の土日（実施日は町内会で決定する）
主　催	温泉町まつり実行委員会
現　状	まつり実行委員会が、焼き鳥、焼きそば、おにぎり、焼酎、ビールなどを準備し、住民たちはテントを張り、ゴザを敷いて楽しく語り歌う。老人会が地蔵を守り、参拝者に料理を振る舞い、語り合う。手作りの雑貨も展示している。

39 不動尊夏祭り（ふどうそんなつまつり）

中原

開催場所	不動坂周辺（中神町城本）
祀られている神仏等	不動明王立像
特　徴	中神村の筌場集落にあった龍門寺が廃絶したのち、現在地に不動堂が造られた。「球磨絵図」にも「不動坂」と記載がある。 弘治元（1555）年に再興された中神龍門寺の不動明王像は、18代相良頼房（義陽）らが願主となっていた。堂内には、いずれも室町時代の作と伝わる不動明王像、阿弥陀如来坐像、観音菩薩立像が祀られている。火災などの災害から、地域を守るために祭りを始めたと伝えられている。
祭　日	旧暦6月28日（その直前の土曜日に実施）
主　催	中神町城本町内会
現　状	幟旗をたてた境内では、参拝者をお茶菓子で接待し、焼きそばやかき氷、生ビールなどを販売している。

40 菅原神社夏まつり（すがわらじんじゃなつまつり）

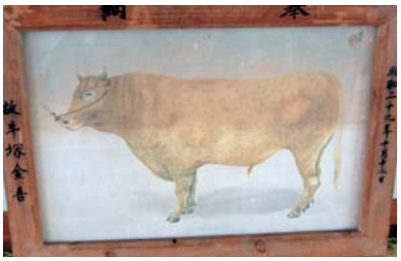
中原

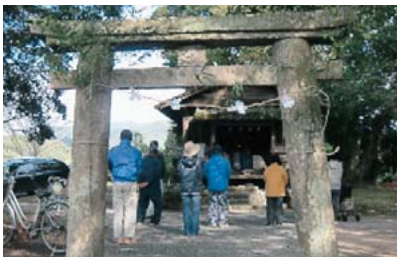
開催場所	菅原神社境内（下原田町西門）
祀られている神仏等	菅原道真
特　徴	北野天満宮（京都府）と同体で、南北朝時代の元中6（1390）年に鎮座して以降、地域の信仰を集めてきた。 明治5(1872)年、社格が村社になり、八王子神社と木船神社は、境内社になる。 当時は、社殿内で神職による祝詞奏上（のりとそうじょう）や地域の有志による玉串奉奠（たまぐしほうてん）などが行われていた。 また、西門地区は、江戸時代から御伊勢講を続けていて、「天照両皇大神宮」掛軸は、1670年代に書かれたものと推定される。
祭　日	8月初めの日曜日
主　催	下原田町西門町内会
現　状	西門菅原神社の神事祭りは別日に行われ、夏祭りは町内の地域の振興や親睦を深める祭りの形態と思われる。

41 牛塚神社祭り（うしづかじんじゃまつ）

中原

開催場所	牛塚神社境内・公民館（上原田町牛塚）
特　徴	永正7(1510)年頃、八代郡坂本で飼われていた牛が逃げ出し、照角山（てるがく）(球磨村神瀬)を越えて、上原田町馬草野の牛と角突き合いし、双方ともに死んだ。飼い主たちは、話し合いの上、この地に牛を埋葬したので牛塚と呼ばれるようになった。 ところが、翌年から作物が実らず、疫病が流行り、不幸が続いたことから、住民が牛塚を地主神として毎年祀ることを願掛けした。その後、この村は栄え、総てがうまくいくようになったという言い伝えがある。 牛が埋葬されたところは、後に社が建てられた。社が傷み、建て替えられたとき、床下から石棺が出てきて、中には刀や牛の鼻具などが入っていた。 それを崇めるため、社の後ろに塚を造り、石棺を埋めた。塚にある大きな石板は、石棺の上にあったものといわれている。
祭　日	旧暦9月の丑の日（旧暦で9月が2回ある時は話し合う）
主　催	上原田町牛塚町内会
現　状	午前10時、原田菅原神社の宮司による神事が行われた後、祭りに来た人々に赤飯と団子を振る舞う。その後、住民は公民館で交流を深める。





「旧暦」「新暦」について

旧暦は、月の満ち欠けで 1 ヵ月を数え、新月を 1 日、次の新月で翌月の 1 日と考えていました。その間を平均すると 1 ヵ月が 29.5 日間で、 1 年は 354 日になり、今の暦(太陽暦)より、1 年が 11 日程度短くなるため、3 年に 1 度「閏月（うるうづき）」を設けて、1 年を 13 ヵ月として季節のずれを調整していました。

現在使われている世界共通暦である新暦は、明治6(1873)年より採用されましたが、地球が太陽の周りを回る周期を基準としており、1 年を 365 日、4 年に 1 度 366 日の「閏年（うるうどし）」を設け、調整しています。

古くから行われているまつりは、祭日が決まっていますが、明治になって暦が新暦になったため、開催日としては、旧暦と新暦が混在しています。

御伊勢講

御伊勢講は信仰に基づいて、伊勢神宮参詣を目的に集まった講です。正保3(1646)年、青井阿蘇神社の大宮司であった青井惟貞が郡内の神職を集めて、御伊勢講を開いたのが起源とされています。

その後、郡内各所に講が結ばれていったようで、現在も続く御伊勢講の中には、寛文10(1670)年前後に書かれた「天照両皇太神宮」掛軸や、江戸時代からの講帳を保存している所もあります。

これらの講は、青井阿蘇神社を頂点とするネットワークができており、伊勢神宮から「御師」の使いがやってきた時は、各講から集められた祈祷料が奉納され、伊勢神宮からは伊勢暦や神札が配られました。

延享2(1745)年には、26代相良頼峯(よりみね)以下、士農工商すべての人々が奉納しています。歴史書「嗣誠獨集覧」や、現在も続く人吉市中神町の大柿御伊勢講にその記録があり、青井阿蘇神社境内の伊勢大神宮前には、同年2基の灯籠が捧げられました。

江戸時代、「一生に一度は伊勢詣りをしたい」との思いを実現した、米屋彦兵衛のような人吉の人物に関する記録は、あまり残っていませんが、五穀豊穣・家内安全祈願の御伊勢講は、形を変えながら、今も町内会単位で続いています。大柿講には、昔ながらの姿が残されていて、相良文化の一端がうかがえる貴重な民俗行事ともいえるでしょう。

講行事の基本は、正月、5月、9月の年3回です。現座元から次座元への移動は、講品担ぎ箱や神式小道具などの行列を組んで賑やかです。しかし、受け渡し行事は、公民館での町内会や敬老会などとの共用直会(なおらい)に重なっていて、時代の波により変化しながら、ここでも昔を物語る相良文化が継承されています。

人吉市内の御伊勢講は、10年前の調査では24か所を数えています。細々と続いてはきたものの、徐々に減少しつつあり、今のままでは、講所有の貴重な文化遺産も消失の危機に見舞われるかもしれません。

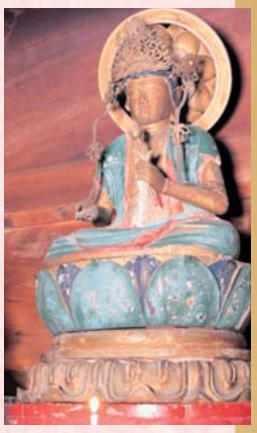
観音信仰と相良三十三観音めぐり

観音信仰は、「法華経」の伝来とともに移入されたものです。

法華経によると、観世音菩薩は、三十三の姿に変えて、救いを求めるすべての生き物の願いを叶えるといいます。ここでは、普段お参りしている観音さまの姿だけが観音さまとは限らず、近くを走り回っている小さな子どもたちも、観音さまが正しい道を伝えようと姿を変えて出現されているのかもしれないことを表しています。

つまり、観音さまとは遥か遠くにあるのではなく、わたしたちの身近な日常生活の中にいつもおられるという考え方です。

この三十三という数に合わせて始められたのが、三十三所観音霊場巡礼です。三十三の霊場（札所）をめぐり、祈ることで功徳があるといわれ、江戸時代になると庶民の間で流行します。長い年月の間には、納経・ご詠歌など独特の習俗を生み、現在でも多くの人々によって伝承されています。



人吉球磨地域には、仏教の教えを自然と日々の生活に活かし、地域住民の手でいつも美しく保たれた観音堂や観音像が数多く点在しています。

江戸時代前期になって、聖観音、千手観音、十一面観音などを中心に、郡内に三十三ヶ所の札所が選定されました。この相良三十三所観音の札所には、井口武親と井口美辰の仏をほめたたえる御詠歌が、それぞれ2首ずつ奉納されています。

以来、春と秋の彼岸の時期に、観世音菩薩の三十三の悲願にちなんで、すべての観音堂が一斉開帳されるようになりました。その日には、地域住民がお茶立てと郷土料理などで心あたたまる接待をし、参拝者を迎えてくれます。そこでは、地域住民や他の参拝者とのふれあいもあるでしょう。

相良三十三観音めぐりは、四季の自然を感じつつ、御詠歌を詠みながら、一つ一つの札所を順番に参拝し、心豊かな時間を過ごすのも醍醐味であり、人吉市指定無形民俗文化財と日本遺産人吉球磨の構成文化財にもなっています。

庚申塔、庚申信仰

庚申（かのえさる）とは、十干の「庚」と十二支の「申」の組み合わせで、60日に1度巡ってくる日のことです。中国の伝統的な民間宗教である「道教」の教えの中に、「人の体内に三尸虫（さんしちゅう）がおり、隠している過去をも知り、庚申の日の夜に眠った人の体内を抜け出し天に昇り、その人の罪悪を告げるとともに命を縮める」という説があります。

そこで、人々は長生きをするため、庚申の夜、体内の三尸虫が体内から抜け出し天に昇らないように徹夜をして過ごしました。これを「守庚申」と呼んでいます。

日本における守庚申に関する古い記載では、慈覚大師円仁の旅行記である「入唐求法巡礼行記」を見ると、平安時代初期の承和5(838)年には、すでに庚申信仰が日本に伝わっていたことがわかります。当時、守庚申を行っていたのは貴族階級の人々であり、詩歌管弦を一晩中続けたり、酒席を設けたりして徹夜していました。「枕草子」にも、宮中で内大臣が念を入れて守庚申の準備をしているという話が出てきます。この「守庚申」の形は、15世紀中頃まで続いたようですが、後に庚申信仰と仏教が結びついたと考えられています。その過程で、守庚申は「庚申待」と呼び名を変え、武士階級にも広がりました。天帝や猿田彦、青面金剛などを本尊とし、その前で勤行や宴会をしながら徹夜する行事となりました。

庚申信仰が最も盛況だったのは江戸時代で、一般社会に普及する中で、「3年間18回の庚申講を終えると、三尸虫が悪行を告げることもなくなる」といわれていました。そこで、願いを成就した記念に建てたのが「庚申塔」なのです。

人吉球磨には、600基以上の庚申塔が現存するともいわれ、他地域に比べてかなり多く残されています。そのうちの最古のものは、錦町の「迫の庚申塔」で天文3(1534)年、人吉市では上原田町馬草野の天文8年(1539)の庚申塔（どちらも熊本県指定重要民俗文化財）が現存します。こうした人吉球磨の「庚申信仰と庚申塔」は日本遺産の構成文化財となっています。

おわりに

人吉には、数えきれないほどのまつりが存在します。まつりの中には、祟りを鎮めたり、地域や家族の健康や安全を祈る目的で、400年以上前から脈々と受け継がれていたり、中には鎌倉時代から行われていたと言い伝えられているものもありました。

また、これらのまつりがどのように発展して来たのか、過去の文献でわかるものもあれば、言い伝えに頼らざるを得ないものもありました。

今回の調査では、数えきれないほどあるまつりの中から、人吉でどのように神仏を祀り、その信仰とともにどのような祭りを行っているのかを中心に、同じような由来のものは、ほんの一部を代表してまとめてみました。

その結果、取り上げられなかったものも数多いのですが、地域の高齢化に伴い、運営自体が困難になっているまつりや、人口減少による人手不足や運営費の確保の問題などにより、消滅の危機にさらされているまつりが数多くあることもわかりました。その反面、一時は休止していたまつりが、地域の若者の力で復活したものもあり、大変喜ばしくも思いました。

現存するまつりの多くは、地域の安全や家族の健康を願いつつ、人々の交流や地域の振興を求めて行われているものが多いのかもしれません。

この記録を、後世の人々に残すことにより、将来、まつりを盛り上げ、受け継ぐときや、休止してしまったまつりを復活させるときのヒントにするなどの史料になればと願っています。

2年余りにわたる長期間、調査にご協力いただきました町内会役員の方々、まつり担当者の方々、興味深い話を聞かせていただいた町内住民の方々には、深く感謝を申し上げます。そして、今後、人吉におけるすべてのまつりが、後世にわたって盛況に受け継がれていかれることを期待してやみません。

平成 29年 3月

人吉市文化財保護委員

井上　道代　　犬童　敏春　　下田　文仁　　種元　弘一郎

福川　義文　　堀　伎美子　　松葉　英星

参考文献

『暦を知る事典』（東京堂出版、2006 年）
『日本の祭り　6（九州・沖縄編）』（理論社、2015 年）

上村重次「相良 33 所観音霊場順礼　その歴史をたずねる」（『人吉文化』46 号、1965 年）
高田素次・上村香・北村龍雄『相良三十三観音めぐり』（人吉温泉観光協会、1977 年）
豊永鈴蘭『肥後相良今昔史誌』（人吉出版社、1979 年）
上村重次『改訂増補　九州相良の寺院資料』（青潮社、1986 年）
『相良三十三観音』（渋谷敦　監修、人吉球磨地域観光推進協議会）
福川義文『国宝　青井阿蘇神社』（熊本日日新聞社、2008 年）
井上道代「人吉球磨の御伊勢講」（『ひとよし歴史研究』16 号、2013 年）
和田好史「相良三十三観音めぐり」（『JUNO』143 号、2017 年）

『球磨郡誌』（球磨郡教育支会、1941 年）
『球磨の庚申信仰（一）改訂版　人吉篇上巻』（熊本県立球磨工業高等学校郷土研究部、1977 年）
『人吉市史　第一巻』（人吉市、1981 年）
『熊本県歴史の道調査―人吉街道―』（熊本県教育委員会、1984 年）
『県内主要寺院歴史資料調査報告書（三）人吉・球磨・芦北・水俣地区』（熊本県立美術館、1984 年）
『人吉市遺跡地図』（人吉市教育委員会、1991 年）

『大日本古文書　家わけ第五　相良家文書』（東京大学出版会、1970 年）
『肥後国誌』（青潮社、1971 年）
『新訳　求麻外史』（青潮社、1972 年）
『南藤蔓綿録』（青潮社、1977 年）
『歴代嗣誠独集覧』（『相良村誌　資料編二』、相良村、1995 年）
『麻郡神社私考』（熊本県神社庁球磨支部、2007 年）
「球磨絵図」

『郷土』（郷土研究会）
『人吉新聞』（人吉新聞社）

人吉のまつり

～春夏秋冬・四季の楽しみ～

平成２９年３月

編　集：人吉市文化財保護委員会
発　行：人吉市教育委員会（歴史文化課）
〒868-8601 熊本県人吉市下城本町 1578 番地１
電話　０９６６－２２－２１１１㈹

印　刷：株式会社 協和印刷 人吉営業所

人吉市教育委員会・人吉市文化財保護委員会